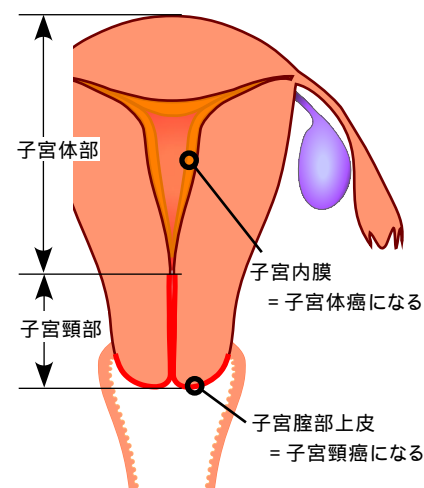


## 子宮頸がん検診のご案内

子宮頸がん検診：子宮にできる癌は大きく分けて、子宮頸癌と子宮体癌があります。今回検診で行うのは子宮頸がん検診で、子宮の入り口(子宮腔部)の表面を箒のような器具でこすり、表面の細胞を採取します。これを顕微鏡でみて癌細胞の有無を判定するものです(細胞診といいます)。子宮の細胞を直接観察して癌を見つけるもので、症状がなく肉眼で見てもわからない初期段階の癌を探し出します。

「子宮頸がん検診」という場合、厳密にはこの検査だけを指します。性交渉の経験のある方全員に推奨される検査です。上皮内癌までの段階で見つけて治療すれば、子宮を摘出しないで済みます。超音波検査ではこのような初期段階の子宮頸がんは発見できません。この検査では子宮筋腫や卵巣の病気は見つけれません。また、子宮体がん検診は、別の採取法で行う検査です(後述)



### 検診のやり方

婦人科内診台に上がり、腔内を展開する器具(腔鏡)を挿入し、箒のようなブラシで子宮腔部の表面を直接こすって細胞を取ります。これを染色して顕微鏡で観察します。痛みはほとんどありません。

#### 予定を組むにあたり

月経中の方は出血が多いうちは避けたほうがよいでしょう。終わりがけでわずかな出血であれば検査可能ですが、出血が多いうちの検査は精度が落ちたり結果の到着が遅れたりする可能性があります。

妊娠中の方でも検査は受けられますが、通常は妊婦健診を行っている医療機関で主治医が行います。またその際自治体の費用補助が出る場合もありますので、妊婦健診施設にお問い合わせください。

#### 性交渉の経験のない方の場合

子宮頸がんの原因は95%以上がHPVウイルスの感染が原因とされています。これは性行為によってうつります。従って性交渉の経験がない方は子宮頸がんにかかる確率がかなり低いといえます。ただし、一部のタイプの子宮頸がんはHPV感染が見られないことがあるため、絶対にならないとは言えません。また、子宮頸がんの検査は子宮腔部から直接細胞をこすり取って行いますので、性交渉経験のない方にとっては腔内に診察器械が入る手技で痛みなどのため細胞の採取が十分に行えず、検査の精度が落ちる可能性があります。以上をご理解いただいたうえで検診を希望される方は対応いたしますが、細胞を取ったうえで十分な結果が得られなかった場合でも恐縮ながら検診料金はお返しできかねます。

性交渉のある方は、子宮頸がんの原因となるHPV感染は若いうちに起こりやすいので、20代のうちからしっかり検査を受けておくことをお勧めいたします。

#### 子宮摘出後の場合

子宮を全摘出した方は、子宮を取った後の腔の奥が縫って閉じてあり、そこを「腔断端」といいます。子宮はないので理論上子宮癌はできません。しかし、子宮を摘出した理由が子宮癌であった場合は、腔断端に再発や転移という形で癌が発見されることがありますので、治療にあたった主治医から術後の腔断端の細胞診(検診)を推奨される場合があります。このような場合は、通常の子宮頸癌検診と同様の手法で、腔断端の細胞をこすり取って、検診とすることができます。癌以外の理由(子宮筋腫など)で子宮を摘出した場合、子宮癌はできませんが、かなりまれながら腔断端に癌が発生することがあります。この癌は、子宮癌ではなく「腔癌」という診断になります。このようなまれな可能性であってもチェックしておきたい、という場合は、子宮のある方や子宮癌治療後の方と同様に検診を選択することができます。

子宮体がん検診：子宮の内部、奥のほうにまでブラシのような器具を入れ、細胞を採取し、顕微鏡で判定します。頸がん検診に比べ、痛みや出血が多くなる傾向があり、また迷走神経反射が起きて低血圧、徐脈となり一時的に具合が悪くなる方がおられます。また子宮の形状から、細胞採取が困難な方がおられます。従って健診のみの施設ではドック検診として行っていない場合が少なくないようです。一番町Linoレディースクリニックでは通常の外来で、不正出血などの症状、子宮内膜肥厚などの異常所見がある方に対しては保険診療の対象の検査として行っています。症状がなくともリスクが高いと思われる場合には検査を行う場合があります。この癌はHPVウイルスとは無関係で、発生原因が全く異なります。

## 婦人科オプション検査のご案内

超音波(エコー)検査：婦人科超音波検査は、超音波断層診断装置のプローブと呼ばれる器械を膣から入れ、子宮の入り口付近にあてて子宮や卵巣などの画像診断を行う「経膣エコー」検査です。プローブを腹壁に当てて行う腹部エコー検査よりもはるかに多くの情報が得られます。子宮筋腫、卵巣嚢腫、子宮内膜ポリープなどを見つけるのに適しています。しかし、子宮頸がんの早期発見はできません。検査時の条件によってはクリアな画像が得られないことがありますので、時期を変えての再検査や他検査が必要な場合があります。適当な間隔を置いて再検査をしたり、問診やMRIやCT、採血などほかの検査

と組み合わせることによって初めて診断や管理方針が決まる場合も多いため、この検査で異常が疑われたときは、多くの場合、コメント、判定に従い、医療機関の受診をおすすめすることになります。なお、性交渉の経験がない方は、肛門から直腸内にプローブを挿入して、同様の検査を行うことができます(経直腸エコー)。

超音波断層診断装置

